

DISMEMBER

THE NOVEL

著 恵満

絵 スガレオン

目次

プロローグ	006
憎悪	010
鉄輪	020
遊戯	030
苦痛	044
開放	050
エピローグ	058
あとがき	060

この物語は成人向けです。

18歳未満の閲覧を固く禁じます。

この物語には出血や欠損・暴力などのグロテスクな表現があり、それらに興味の無い方や嫌悪感・不快感を覚える方の閲覧はご遠慮下さい。

この物語によって生じる影響およびそれらがもたらす結果については執筆者は一切責任を負いかねますので予めご了承下さい。

この物語に登場する人物・団体名は全てフィクションです。また、作品中の犯罪行為および描写は全て架空のものであり犯罪行為を模倣させる、あるいは助長するためのものではございません。



登場人物紹介

万智 . . . 主人公。父の死の原因となった切奈を恨む。

雪村切奈 . . . 登校拒否のアルバイト少女。負けず嫌いな性格。

西野 . . . 万智の復讐に手を貸す自称フリーライター

雪村切奈の手足は彼女が息絶える最期まで見つかることはなかった。

プロローグ

万智は1分間に3度も壁掛時計に目を遣った。秒針が刻む間隔は異様に長く、眺めているだけで喉が渴いてくる。

年齢の離れた先輩が電話の向こうの相手に平謝りをし、プリンターがA4サイズの紙を吐き出しても、時計の針が進む音だけはフィルターをかけたかのように耳に届く。

眼前のディスプレイでは既に表計算ソフトを閉じており、デスクトップに設定している子猫の壁紙の上を意味もなくカーソルが行き来していた。

今にも小さな尻がクツションを敷いたOAチェアから離れそうだったが辛抱強く待つ。

まだか、まだか……心の中で反芻すること数十回。終業を告げるチャイムが鳴り、万智は手早く帰り支度を始めた。

報告書はページの順番を気に留めないままクリアファイルに押し込み、筆記用具の類は無造作に事務機の引き出しへと放り込む。

「お疲れ様でした！」

まだ席を立たない同僚を尻目にロッカールームまで走る。

万智が頑なに定時退社しようとすることに慣れているので誰も咎めるものはいなかった。

女子更衣室に着くなり、袖を絡ませながら事務員用の作業着を脱ぎ捨て、あっという間に着替える。

さらにロッカーに詰めてあったポストンバックを肩に下げて次は自転車置き場まで駆けた。

その途中ですれ違った社員には、煩わしさを感じながらも短い挨拶を交わしていく。

化粧つきの無い万智は19歳でありながら、童顔と小柄な体躯のせいで中学生と間違えられることが多い。

その容姿で多少なりとも待遇面で得な立場にいることを本人は自覚していなかった。

つまり、色々と大目に見られている。

「おや？今日も急いでるね、お疲れさん」

門を出るときに守衛から声をかけられ、頬の筋肉を無理に引っ張って笑顔で頭を下げた。

愛想を振りまく外面と、それとは全く異なった内面の温度差にストレスを感じつつ、あくまで普通に振る舞う。

そしてペダルを漕ぐ足に力を込めて勤め先の建物を遙か後方へ置き去りにした。

すると心に溜まっていた淀みが晴れ、身体が浮かび上がりそうになる。果てしない開放感から声を上げてしまいたいそう。

帰路の風景は寂れた地方都市のもので、万智の心中とは正反対にくすんだ色をしている。

閑散とした商店街は郊外の大型ショッピングモールに根こそぎ客を取られ、閉まったシャッターがやたらと目につく。

生まれ育った場所に縛られている万智にしてみれば、それらは呪いに等しい。

そいつは古臭さや野暮ったさといった言葉で、何もかも灰色に塗り潰そうとしてくる。

しかし今の彼女にとつては些細な事に過ぎなかった。暗澹とした現実など吹き飛ばすほどの非現実を手にしたのだから。

時折、賑わっている総菜店や高校生がたむろするコンビニもある。それらを尻目に万智は急ぐ。動悸が激しくなり、息が切れるのすら構わず進む。

職場から自宅までは約10キロもある。クルマを持っていないので自転車通勤せざるを得ないが苦にならない。

ただひたすら、早く帰りたいとだけ考えている。

街中を抜け、青く伸びた稲が広がる田んぼを抜け、ポツンと一軒だけ建っている自宅へと辿り着いた。

塀に囲われた古びた平屋は世事にも綺麗とは言えず、庭も殆ど手入れされていない。

もともとは農家だったらしく、納屋まである。

一人で住むには十二分に広いものの、そのせいで掃除や整理が追いつかないでいた。

自転車は門柱の傍に置き、玄関を開けてポストンバックを置き去

りにして1番奥の部屋を目指す。軋む廊下は埃が溜まっていて、万智の駆け足がそれを舞い上げた。

最奥にあるのはカーテンを全て締め切った6畳の部屋だ。フロアリングの上には棚も椅子も、何一つ家具が無い。

ただ人間が1人、部屋の中央にいただけだった。

「ただいま、切奈」

足音でとうに気付いていたのか、切奈と呼ばれた少女は目だけで万智を見遣った。

しかし、相手の姿を確認しただけですぐに俯いてしまう。

「いい子にしてた？」

「……」

答えない切奈に構わず万智は抱擁してやった。薄手のシャツ越しに伝わってくる切奈の肉の感触が心地よい。

しばらくそうしていると部屋の臭いに気付き、後始末をしようとして入り口に用意しておいたビニール袋とスコップを手取る。

部屋の中心にはトレイが何個も並べてあって、その中にはベットのトイレ用の砂が敷いてあった。

万智はその一部をすくい取ると新しいものを補充してやった。その次は食事をさせてやらなければならぬ。

世話を怠ったら切奈は死んでしまう。そんなことは嫌だった。万智は切奈のことが大好きなのだ。

だから食べ物は全部、口移しで与えている。よく咀嚼してやるこ

とが愛情だと思っている。

しかし、切奈は吐き出してしまうことも多い。今朝もそうだった。今日は栄養価が高くて食べ易いものにしてやろう。

「ゴハンあげるからちよっと待っててね」

そう決めた万智は冷蔵庫に大量に保管していたタンパク質入りのゼリー飲料を持ってくる。

まずは自分の口に含み、それから両手で切奈の側頭部を押さえた。首を振って逃げることもあるので仕方なくこんな方法をとっている。

万智は頬の筋肉に力を込め、ゼリーを送り出していく。

すぐ前にある切奈の整った顔が歪み、しかしロクに抵抗も味がなのまま呻きながら食事を受け入れていった。

「んっ……」

舌を絡め、相手の口蓋を舐め回す。ゼリーが切奈の唾液と混ざって甘い味になった。万智はそれを自分の喉にも通す。

しかし食事を与えるペースが早かったのか、咳き込んだ切奈の唇から白濁色のスジが垂れ落ちる。

顔を離れた万智は下腹部が段々と熱くなっていくのを感じながら、ハンカチで口元を拭いてやった。

肌からは血の気を失い、目の光もなく、口元にだらしなく白い液体を零している。

「……」

そんな様子に我慢が出来なくなり、今度はただただ切奈の身体を貪った。

無言のまま手のひらに収まらない胸を乱暴に揉み、円錐に尖った乳首を舌で弾きながら弄んで吸い込み、股間に指を這わせる。

やがて粘膜の合せ目から水音が聞こえてきた。

同時に万智の息が荒くなっていく。さらに神経が昂ぶって身体の末端がより多くの血を求めてきた。

絶え間なく脈打つ心臓はさらに多くの仕事をする。

愛撫を続けるうちに切奈が小さく仰け反り、粘性のある雫が溢れてきた。

「イッちゃった?」

楽しそうに声をかけてやるが返事は無い。その無言がさらに燃料となつて興奮を高めていく。

万智は右手で切奈の肌を撫で回しながら、左手の指先を自分の下着の中に入れる。

とうとう自分を慰め始めた。そうでもない限り、身体を蝕む欲情は消えそうにない。

切奈のいる部屋は24時間、空調を効かせている。外よりも涼しい筈だが汗は止まらなかった。

勃起した赤い肉芽を摘み、秘部に人差し指を第二関節の深さまで出し入れし、万智もまた同じように甘い蜜を垂らす。

静かに、淡々と、薄暗い中で互いに絶頂するまで歪んだ性行為は

続いた。

やがて満足した万智は上気した顔でへたり込み、切奈の姿を見上げる。

部屋には単管パイプで組み上げられたジャンクルジムのような構造物が鎮座していた。

切奈は豊富な胸やピンク色の女性器を晒した全裸のまま高所作業用のフルハーネス（落下を防ぐために身体に巻き付けるベルトである）を装着され、そこから吊り降ろされている。

ベルトのバックルを手で外せば、床に落下こそするものの逃げられそうなものだ。

しかし、彼女にはそれができない理由があった。手を拘束されている……わけではない。

「綺麗だよ、切奈」

その美しさに溜息をつく。

瑞々しくて若い肉体は女性として完璧な魅力を備えていた。しかし、邪魔な部分もある。

蛇の絵に脚を描くことを蛇足という。国語の授業で習った。

今の切奈は余計なものが、一切無い。

「……食事の途中だったね。もうひとつゼリーあげるから、いっぱい食べてね」

もつといっぱい食べてもらわないといけない。最近、食が細っているから尚更だ。

万智は2個目のゼリー飲料を取りに台所へ向かう。

だが、金具がこすれる微かな音がして背後を振り返る。ハーネスで吊るされた切奈の身体が僅かに揺れていた。

どうやら動こうとしたらしい。

「無駄だよ」

優しく微笑んでやる。その奥には決して覆ることのない強弱関係から来る余裕があった。

「切奈は一生、ここで過ごすの。逃げるなんて絶対にできない」
とうに絶望を植え付けているのだ。

今更、言葉責めをしたところで大差ないだろう。

それでも愉しくてついつい、事実を告げてしまう。

「手足を切り落とされたんだから、もう何もできないでしょ？」

今度は唾つてやった。

その声に反応したのか嗚咽が漏れる。

腕も、脚も、切奈には無かった。上腕の先と大腿の先はぼつかりと欠けていた。その上を革製のカバーで覆っている。

この先もずっと逃げ出すことも出来ず、口移して餌を与え続けられ、排泄を床に垂れ流し、万智の禍々しい愛情を一身に受け止め続けなければならぬ。

四肢を切り落とされて裸で吊るし上げられた少女は、とうに枯れた筈の涙を流した。

#1 憎悪



雪村切奈にはストーキングされているという自覚が無かった。

成績優秀な彼女が学校へ行かなくなり、代わりにアルバイトに精を出すようになったのはここ2ヶ月ほどのこと。

そのバイト先というのは所謂『メイド喫茶』である。

ブームに便乗して開店した経緯ではあるが、地方都市に在りながら未だに潰れずに営業していた。

もともとは老店主が営んでいた喫茶店を引き継いだ現オーナーが少しばかり店舗に手を入れ、若い女性を雇ってメイドのコスチュームを着せている。

雰囲気は使用人のいる館ではなく純然たるカフェであり、口煩い客ならメイドが何たるかについて説教でも垂れそうだった。

だが明るくてカジュアルな雰囲気はターゲットにしているサブカル層以外にも受けが良く、何よりサンドイッチとコーヒーが美味である。ごく普通に見える年寄りが新聞を広げている姿は、この手の店には珍しいだろう。

この辺りはオーナーの純然たるセンスの代物だ。特に従業員の女

の子のルックスと接客態度に対しては厳しい。

そして敵しいなりの対価を支払ってくれた。何かと金銭的な面で苦勞の多い切奈はバイト代の良さに反応して飛びついたクチだが、今ではそれなりに乗り気で仕事をこなしている。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

エプロンを当てがってウェストを絞り、お辞儀をすれば下着が見えてしまうのではないかと思えるほど短いスカートを翻し、膝上まであるニーソックスを履いて接客する。

清々しいまでに扇情的な衣装も、お金のためと解釈すれば納得できた。生憎と切奈にはそんなものを喜ぶ連中のごがよく分からない。しかし需要があるのだから供給されるのだろう。

本名をもじって「ゆきな」とバイト中は名乗り、やや間が抜けてはいたが平仮名でそう書かれたネームプレートを胸のあたりに留めている。

(さて、お仕事。お仕事)

冷え切った心とは乖離した笑顔で客を出迎えると(※男性客のことは『ご主人様』と呼び、女性客のことは『お嬢様』と呼ぶのが店のルールだ)、先ずは相手の反応を探る。

初めての客なら少し恥ずかしそうに、慣れた客なら妙に堂々と入店してくるのだ。

そこからどう接客するのか、切奈の中ではルーチンが出来上がっている。

しかし、今回はそのどちらにも当てはまらないようだ。

お嬢様と呼ばれた黒髪の少女は落ち着きなく店内を見渡し、出迎えてくれた切奈の方を横目で見てあとはレジへ視線を固定する。

年齢は中学生くらい。ポストンバックを下げた地味な格好の女の子だ。化粧っ気は無く、オシャレにも無関心のようなのである。さらにメガネが容姿の野暮ったさに拍車をかけ、気弱そうな見た目をさらに悪い方向に向けてしまっていた。

彼女は新居に放り込まれた子猫のように居心地悪そうに固まっている。期待しているようには見えず、自ら入店したくせに不審なオーラすら滲ませていた。

もしかしてアルバイトの応募で来たのだろうか。切奈は思案してみよう。

仮にアルバイト希望者だったとしたら不採用になるのが目に見えていた。オーナーの眼鏡に叶うとは思えない。

では客だとしたら……態度は妙ではあるものの、丁寧に接する分にはマイナスにならない。

「お嬢様、当店は初めてですか？」

おかえりなさいと言ってしまった出迎えとは相反するが、このままレジ前でフリーズされていたのでは溜まったものではない。

しばらく硬直していた少女は油を注し忘れた機械の如く、ギギギと音を鳴らしながら切奈の方へ顔を向けた。口角を強張らせたまま辛うじて頭を下げ、「はい」という意思表示をする。

その様子があまりにも滑稽だったのでクスッと笑ってしまった。

接客業に有るまじき行為だったが当人以外は誰も気付いていない。「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。まずは席までご案内しますね。こちらです」

とりあえず、席に着いてもらおう。そう考えた切奈は窓に面した一番奥の席まで案内する。後に続く少女の動作はぎこちなく、一昔前のロボットが中に入っているのではないかと疑いたくなった。

切奈は自らの経験を探って、ある仮説を立てる。
根拠は直感だけが意外と当たるものだ。

これだけ緊張しているが実はプライドが物凄く高いのではないだろうか。失態を見せたくないという気持ちが出過ぎて血液の巡りが悪くなっているように思える。

それに見た目からも少女はオタク然としていて、コミュニケーションが苦手そうだった。容易には心を開いてくれそうにない。

だとしたら笑ってしまったのは失策である。

とりあえず自分の感じたことを信じて、なるべく敬っているような動作で椅子を引いて少女に座ってもらう。目を伏せて頭を下げた切奈が待つまでもなく、少女は着座してくれた。

ポストンバックからはガチャガチャと金属が擦れる音がして、重々しく床に置かれる。

(随分と重そうな荷物……)

余計な推察はさて置いて丁寧にメニューを開き、差し出す。彩り

鮮やかな料理の写真が少女は左上から順に眺めて考え込んでいた。

その間にお手拭きと水の入ったグラスを置き、少しだけ待つ。何やら唸っていて半眼になっている。

どれにするか迷っているのだろう。切奈は助け舟を出すことにした。

「お嬢様、オススメはオムライスになっております」

メニューの右下にある卵のドームを指して、小さく首を傾げてやる。本当はもっと長い名前なのだが余計な部分を省いて伝えた。

提案にキョトンとした少女は両肩を持ち上げて力いっぱいオムライスを指差す。怯えているようにも見えるが心中は分からない。

「お飲み物はどうぞされますか？」

今度はメニューの最後のページを開いてやる。少女は迷わずオレンジジュースを指し示した。

即座に意思表示したことにやや驚いたものの、迷わなかったということは好物なのだろう。

もともと、見た目から子供なのだからコーヒーや烏龍茶の類を頼むとは考え難い。

「ご注文を繰り返させていただきます。オムライスが1つと、オレンジジュースですね？お飲み物は食事の前でよろしいですか？」

「……」

口を紡いだままうなづき、また落ち着きなく店内へ視線を送り始める。オーダーを厨房へ伝えると切奈は遠目に少女を観察してみる

ことにした。

土曜日の半端な時間のため客は少なく（常連で長居するような人ばかりいる。定期的にドリンクを注文してもらおうのが店のルールだ）、幸いなことに人手は足りている。少しくらいサボタージュしても怒られないだろう。

この手の店は本当に初めてなのか、あるいは極度のコミュ障か。どちらとも判断できない。目に入るものを珍しそうに見る様は小動物のようで段々と愛らしく思えてきた。

そんな彼女の元へまずはオレンジジュースを持っていく。黙ったままストローを指し、少女は少しだけそれを飲んだ。チラリと切奈を一瞥だけして、すぐに視線を外す。

（ちよつと変わった子だけど……）

色々な客が来るが、特に風変わりな彼女の境遇や心の内側を想像してしまふ。

しかし、今はアルバイトの時間なのだ。いつまでも思考に耽っているつもりは無かったのである程度のところで区切りをつける。

そして次に入ってきた若い男2人組の客を甘い声で迎え入れ、同じように注文を取った。

記憶にある限りでは初めての客である。彼らの視線は完全に切奈の胸元と太ももを行き来していたが、来月に振り込まれるであろう給与の額面を思い浮かべながらスルーした。こういうところで嫌悪感を滲ませないので切奈は接客業に向いているのかもしれない。



流石に触られたり、出待ちされたときにはオーナーに相談して厳粛に対処してもらうことにしている。過去に何度かあったことだが、そういう客は出禁になるのだ。

(それはともかく仕事、仕事……っと)

注文を取って愛想笑い。ある意味ではルーチンワークと言えた。

さて、そうこうしているうちに厨房からオムライスが出来上がる。卵の黄色に添え物の緑が鮮やかで表面はフワフワ、中はトロトロの絶品だ。

あの気難しそうなお嬢様も気に入ってくれるだろう。

早速、テーブルまで運ぶと湯気立つ皿にお嬢様が目を奪われた。

それまでの気難しそうな印象から、年相応の表情へと変化していくのが面白い。

ここであと一押ししてやる。オムライスとセットになっている、この手のお店ではメジャーなサービスだった。

少し悪戯っぽく口角を持ち上げて取り出したるはケチャップ。切

奈はそれを両手で頬の横まで持ち上げ、首を傾けた。

「オムライスにお名前を描いて差し上げますね」

「！」

明らかに狼狽えた。少女は赤々とした容器と、いざれキャンパスとなるオムライスを交互に見て「本気？」と目だけで訴えてくる。そういうものがあるという知識は備わっていたのだろう。

まったくの不意打ちというよりは、知ってはいたが自分では頼ま

ない……といった様相だ。

「サービスですから♡」

湯気が立つ中で彼女は考え込み、やがて観念したのか俯いて自分の名前を告げる。

「まち……」

「はい、わかりました♡」

ゆったりと大きな弧を描き、普段であれば絶対に使わないような丸字で『まち♡』と綴ってやる。

みるみるうちに少女の顔は赤くなっていく。

そして耐えられなくなったのか、小さな身体に似合わずに一気に平らげてしまった。

ろくに咀嚼もせず、熱々のまま喉を通って最後はオレンジジュースで流し込むものの数分で食事を終えて会計へと走ってしまう。

重そうなボストンバッグを引き摺りながら店外へ飛び出して行くまでの一連の動作はコメディ映画のようでもあった。

その様子を半ば呆然と眺めていた切奈だったが、『まち』と名乗った少女が嵐のように過ぎ去ったことに少し悪いことをしたかなと反省する。

何となく……幼い頃の自分に似ていた。やたらプライドだけが高くて弱みを見せたがらず、意地をはっていた頃に。

(次は……もし来てくれたら、もっとゆっくりしていてもらおう)



メイド喫茶を飛び出した万智は近くのスーパーマーケットのトイレに駆け込み、湿ったトイレの床にポストンバッグを下ろすと便器目掛けて吐瀉する。鼻をつく臭いに咳き込み、苦しみながらしばらく嘔吐を繰り返す。

そして胃を焼いていた内容を一瞥もしないまま流すと、手の甲で口元を拭って嗚咽を漏らした。悔しさに震え、自分の情けなさに涙する。

いっそ、このまま父親の後を追って死んでしまおうかと迷い、ポストンバッグの中からカッターナイフを取り出した。洒落っ気も何もないその中には他に金槌やノコギリ、あるいは用途の分からない刃物などが詰め込まれている。

いずれもホームセンターでお手軽に買うことができる凶器だった。しかし、万智はそれらを何一つ振るうことなくあの店を去ってしまっている。

意気地なしの彼女が思い立ったように自殺できるわけもなく、数分間はカッターナイフの刃を凝視していたがやがて疲れてへたり込んでしまった。

あるのは殺意だけで、実行するだけの技術も何も持っていない。あらためてその事実を突き付けられた万智はうな垂れ、酸味と甘

味が混じった口を濯ごうとトイレの個室を出る。洗面台に備え付けられた鏡には黒髪・眼鏡の、貧相な体格の女が写っていた。

大して可愛くもなければ整っているわけでもない、垢抜けない自分の容姿が大嫌いだ。よく中学生に間違えられることがあり、その度に19歳でもうすぐ成人するのだと伝えることすら億劫になっていく。

そんな自分をあまり眺めていたくないので、眼鏡を外して顔を洗う。

口蓋に含んだ水道水は不味くてすぐ吐き出してしまったが、まだ鼻腔の臭いが抜けないので何度も短くうがいした。

その様子を奇異な目で見る妙齢の女性を無視し、ようやく落ち着いた万智は重い荷物を手にスーパーマーケットを去る。特売品もタイムセールすらも目に入らなかった。

近寄りやすい空気を纏っている自覚はあったものの、すれ違った小学生と思いき男の子の集団に指を指され、ひそひそ話をする主婦たちの視線が刺さり、とにかく苛立ちばかりを募らせながら歩いた。

ふと、先ほどのメイド喫茶の店員の「ゆきな」の顔が浮かぶ。

背が高く、大きな目をした派手な顔立ちでプロポーションもメリハリがある。表情も明るくて人懐っこく、やたら露出の高い衣装で給仕をしていた。いかにも男好きしそうな売女である。

本名は「雪村切奈」という。2 駅離れた高校へ通う学生だが、現在には不登校となっていて日中もブラブラしている。

そいつは万智にとつて殺さなければならぬ相手であり、この世界に存在してはいけない異物だった。

妄想の中では何度も、何度も繰り返し殺した筈である。泣き喚いて命乞いをする切奈の頸動脈にノコギリを引き、無様に飛び出した血流に大笑いした。

あるいは土下座をさせた彼女の頭を金槌で割って、陥没した頭蓋をさらに蹴って大きく歪ませてやった。

それらは全て万智の脳内の電気信号でしかなく、現実の切奈は今もああして剣呑と息をしている。それが許さなくて震えた。

どうして、万智の父親を死に追いやった女が今も生きているのか。この世界には正義も何も無いのか。

ならば自分がやるしかない。然るべき報いをあの女に受けさせる……つもりだった。

しかし、実際に切奈を前にして凶器の1つも取り出せなかったのは、そんなことをしたら取り押さえられて警察に突き出されるといふ想像が働いたからだ。

勿論、敵の胴体と首を切り離すための道具を選んでいる最中もその予測はできていたものの、全ては衝動的な行動に過ぎない。

幸いにして店に入ってからドス黒い感情は一切薄まることなかったものの、何よりも保身がブレイキとなって思い止まった。

あの場で殺しきることなど無理だったと自身に言い聞かせて納得しておく。

ただし、名前まで知られた上に割高なオムライスとジュースに金を払う羽目になった。しかも全て嘔吐してしまったのだから完全な無駄金である。

それらは屈辱として身体の芯へと染み込んでしまった。

(ちくしょう……)

声には出さない。声を出すことはそもそも苦手だ。

足取りは次第に重くなり、離れた場所にある駐輪場まで戻るのにひどく時間がかかってしまう。これから自転車で帰宅するのはさらに億劫だった。

ビルとビルの隙間に申し訳程度に作られたスペースに停めておいた自転車の前には誰かが突っ立っていた。

万智は自分のサドルに右手を乗せて、左手でスマートフォンを操作している若い男がいることに絶句してしまう。

一言でも、手を退けてほしいと伝えれば済むのだが万智にはそんな気概が無い。

遠目に男を観察して、しばらく時間を置いて戻って見たが、やはり同じようなポーズのまま若い男はそこに居残っていた。

ただでさえストレスに蝕まれていた万智の胃袋は内側から押し上げられるように捻れ、いじめが原因の潰瘍に悩まされていたことがフラッシュバックして悲鳴をあげる。

このままでは家に帰ることすらできない。

これ以上は耐えられない。

万智は意を決して男の傍まで歩み寄ると震える声で抗議した。
「そ、その自転車……あたしのです」

告げた途端に男は微笑みとも嘲笑ともとれない笑みを浮かべる。
その笑顔にどんな意味があったのか万智には読み取れなかった。
年齢は30代半ばくらい。Tシャツにジーンズという凡庸な出で
立ちだったが、流行りに合わせた髪型のせいでイケメンに見えなく
も無かったが老けている。

高価そうな腕時計以外にアクセサリーは身に付けておらず、不思議なほど淡白で影の薄い人物に見えた。

少なくとも話は通じそうな雰囲気だったので、万智も合わせて作り笑いしてしまう。

「万智さんだね？」

「えっ……」

やや濁った低めな声で名前を呼ばれ、万智は凍り付く。この男と過去にどこかで会ったことがあっただろうか……記憶を遡っても分からない。

あるいは印象に残らない見てくれのせいで覚えていないだけかもしれない。

どうすればいいか分からなかった。跳ね上がる心臓を抑え、万智は男の次の言葉を待つ。

「君の復讐に協力しよう。ただし、ある条件を呑めば……ね」

あまりに意外な言葉を耳にしてポストンバッグを落としてしま

う。

誰にも話していない。雪村切奈への復讐計画は、誰にも話していない筈だ。

それこそ万智の脳内だけの話である。どうやって漏れたのか全く分からず、混乱してしまう。

だからか、反射的に聞き返した。

「あなたは一体……」

「条件その1だ。僕の正体は詮索しないこと。でもまあ、偽名でよければ教えてあげるよ」

若い男はまた笑う。よほど穿った見方をしなければ無害な表情の筈だ。

しかし、今度はそれが嘲笑であると万智にはハッキリと伝わっていた。

「あの……私、帰る途中なので……」

関わらない方がいい。直感がそう告げてくる。万智は半ば強引に相手を押し退けて自転車を引き出すと、その場から逃げようとした。

男の方は困ったように後頭部に手を当て明後日の方向に視線を送る。

「まあ、こんな怪しい奴を信用しろってのが無理な話だよな」

「し、失礼します！」

つい先程までせり上がってきた不快感すら恐怖で忘れてしまった。慌ててペダルを踏んだせいでバランスを崩して倒れそうになり

ながら、人通りの多い方へと走り去る。

「僕が用意したのは、楽しいゲームとそこから派生する作品だ。詳しくはそのタブレット端末を見てくれ」

背中から声をかけられ、ハンドルの前に取り付けられたカゴに視線を落とすと何やら長方形の板が入っているではないか。それが男の指すタブレット型のコンピュータだと気付いて、慌ててブレーキをかける。

そんな得体の知れないものはすぐにでも突き返してやりたかった。

しかし、万智が狭い駐輪場を振り返ったときにはもう彼の姿は見当たらない。

その場で右を2回と左を2回、さらに自転車を降りて奥の路地まで覗き込んで確認したが男は忽然と姿を消してしまっていた。

(一体、何なのよ……)

寒気に襲われた万智はそれ以上、何も考えたくないと思った。



一心不乱に自転車を漕いで自宅まで戻った。途中でトラックの前を横切ってしまう、クラクションを鳴らされてさらに心臓が締め付けられる。

だが、あの男の不気味さから比べればどうでもよかった。切奈に対する失敗もあって、一刻も早く全てを忘れてしまいたい。

家に着くなり自転車を門柱の横に乗り捨て、ガチガチ震える手で玄関の鍵を開けると乱暴に靴を脱いで台所へ急いだ。

不眠症に悩む万智は医者から睡眠導入剤と精神安定剤を処方されている。

適当なスナック菓子と水と一緒に、いつもの3倍の量の薬を飲み込んだ。しかし昂ぶっている神経のせいでいつまでも眠くならず、さらに言えば太陽すらまだ落ちていない時間である。

ただただ自分の不甲斐なさを恨みに転換して意識が落ちるのを待ち、次に目が覚めたときには深夜だった。

「なんで……私がこんな目に……」

苛立つて眠れず、眠れないから苛立つ。そんな悪循環がずっと続いている。

自分の中のドス黒いものがどんどん膨れ上がっていくのを自覚しながらも、その矛先はいつも決まった方向に向いていた。

「ゆきむら……せつな……」

あいつさえいなければ。あいつさえ。

あいつのせいで。あいつがわるい。

「お父さんを殺したあいつも死ねばいいんだ」

充血した目で、四つん這いのまま廊下まで出る。自分が疲れているのか、それとも快調なのか、身体が重いのか、軽いのか、上を向

いているのか、下を向いているのか、一体どうなっているのか。

やはり、店で襲いかかって殺すべきだった。けれど武器を入れたポストンバッグはどこにも見当たらない。

その代わりなのか、見覚えのないタブレットPCが玄関に置いてあった。

真っ暗闇の中で光るそれは自分を導いてくれるような気がする。

画面を覗き込めば何かのアプリが立ち上がっていた。英語が苦手な万智には読めなかったが、サムネイルを何気なくタップすると音声なしでノイズ混じりの動画が再生される。

時折、画面がチラついて何かが見えた。人の形と砂嵐が交互に流れ、万智は画面に釘付けになる。

映像は次第に鮮明になっていく。そして何が映っているのか判明した瞬間、万智は大きく目を見開いた。

「これって……」

14、5歳くらいの見知らぬ少女が磔のまま男に殴られ、青痣を作っていく。

そんな映像が無編集で流れ続けた。時折、画面が切り替わると暴力を振るわれている人間が変わっている。

意味不明なその動画に、しかし万智は強く惹かれ、いつの間にか自分を慰めていた。

#2 鉄輪



父は今年に入ってからすぐに、電車で轢かれて亡くなった。

母とはとうに離婚し、親戚とも疎遠の父を見送ったのは万智一人だけだ。

遺体は損傷が激しくて直に見ることができず、バラバラになった四肢が袋詰めになった姿が今でも網膜に焼き付いている。

顔のちよほど上を車輪が通ったとか、シャシーと線路の間に挟まった胴体を引き出すのに時間を要したとか、野次馬が千切れた足首を持ち去ってしまつてネットオークションに出品して別の警察沙汰になったとか、とにかく色々あった。

それら全てが万智の心を擦り減らしたのは言うまでもない。

だが、地獄はその先だった。父は確かに電車で轢かれたが、自殺ではない。

あの日、父は車内で登校中の女子高生のスカートへ手を入れ、その場で取り押さえられて次の駅で他の乗客に無理矢理降ろされたという。

父は駅員の隙をついて線路へと逃亡し、入れ違いでホームへと

入ってきた下り列車の下敷きになって息絶えた。

警察の話では痴漢行為があったとのことだが、それは被害に遭ったという女子高生の弁である。具体的な証拠は全く無い。

少なくとも万智の知る父親は、そんなことをする人間ではなかった。

それを必死に周囲に訴えたものの世間の目は冷たく、痴漢の末に電車で轢かれた自業自得の愚か者……というレッテルを貼られてしまふ。

娘である万智にも中傷は容赦なく突き刺さり、生来の内向的な性格はさらに酷くなって誰とも話をできなくなる。

精神的な疾病を理由に内定がとれていた会社を早々に長期休暇し（経営者の温情で内定辞退ではなく、就職させてもらえた）、鬱屈した日々を過ごしていた。

そんな彼女は心療内科へ通院することでギリギリのところまで生き長らえていたが、一通の手紙によって転機を迎える。

差出人の名前の無い封筒が玄関に挟まっていて、そこには痴漢被害を訴えたという女子高生の詳細なプロフィールが書かれていたのだ。

加害者の名前は「雪村切奈」。17歳。今は高校を休みがちでバイトに精を出している不良少女とのこと。

勿論、働いている店名と住所も載っていた。

全ての原因を知った万智は最初に、ホームセンターへ行つてボス

トンバッグに詰められるだけの工具を買った。

目を抉ってやるための大きなマイナズドライバーに、指を切り落としてやるための金切り鋏、そして手脚を切断してやるための鋸……日曜大工をたまに楽しんでいた父のものは汚したくないからと、わざわざ新しいものを手に入れたのである。

だが、殺意と道具だけでは人は死なない。実際に手を下す必要がある。

先日、それらを持って切奈のバイト先へ乗り込んだものの結局はブレーキがかかってしまい、何もできないまま帰ってきた。

そのことがささくれた心をさらに荒らし、ついには魔の誘惑に乗りかけてしまっている。

「君の復讐を手助けをするというのは信じてもらえたかな？」

連絡をとったのは、この前の特徴のない男である。

西野悟と名乗った彼は「偽名だけだね」と肩をすくめると、わざわざ名刺を差し出してくる。

肩書きにはフリーライターとあって、他には携帯電話の番号とメールアドレスが記載されていた。実際に原稿を書いている雑誌名まで教えてくれたが、それらは万智の記憶からは一瞬で消えてしまう。

年齢は31歳だと告げてきたものの、ファーストインプレッションの通りに老けて見えている。

パツとしない顔もそうだがラフなシャツとスニーカーから軽薄さ

が滲み出ているようで好感を持ってそうにない。

もともと、万智自身も地味な服装にいつものポストンバッグだったので指摘するのは野暮というものだ。

「どうして……映画館なんですか？」

落ち合う場所に指定されたのは規模の小さな映画館である。

上映作品の予告に並べられたディスプレイはどれも古く、最新の作品ばかり並ぶシネコンとは違った客層をターゲットにしたもののようなだ。

レトロな雰囲気のある売店があるロビーの一角には、西野と万智しかない。

他の客も従業員すらも見当たらなかった。2人は長椅子の端と端に離れて座っている。

「人払いするのに丁度いいと思ってね」

入り口には「本日貸切」と札が掲げられていた。西野が手配したらしい。

それなのにロビーにはポップコーンの匂いが立ち込める。他に客がいないというのにわざわざストックしているのだろうか。

「手助けする条件2を先に言っておくよ。『何故』は口に出さないこと。その上で話をしよう」

「……」

「あのタブレットの映像は見てもらえただろう。あれが僕の作品だ。今回、その『材料』に雪村切奈を使いたい。そこで、君にも参加し

てもらおうと思ってるね」

「女の子をリンチするのが……作品なんですか？」

「需要があるのさ。君だって、そうだろう？ 雪村切奈に強い殺意を持っている。けれど1人では達成できそうにない。だから僕たちは協力できる」

いくらなんでも都合が良すぎる。何故を問うと言われても、何故しか出てこない。

何故、雪村切奈を狙うのか。男好きのする顔や体のせいだろうか。

何故、『作品』と銘打ってあんな映像を見せてきたのか。

何故、復讐を目論んでいることを知っているのか。

（わからない……）

西野という男は狂っているのだろう。でなければあんな映像を人に見せたりはしない。

女性へのリンチ動画を制作している奴だ。

到底、信用はできないが……これから切奈を標的にして『作品』を作るということは素直に信じられる。それこそ都合のいい思い込みだが。

「もし、私が協力を断ったら……殺しますか？」

殺されるかもしれない。この映画館に来るまでに抱いていた漠然とした恐怖を口にしてみる。

西野はそれをあつさりと思い飛ばす。

「何もしやしないって」

「あのタブレットを警察に持ち込むかもしれないのに……？」

「あれは中国のローカルメーカーに開発させた特注品でね。動画を再生するのは専用のアプリだし、外部から特定のコードを送信してやると自壊用の基盤に電気が導通して化学反応を起こすんだ。保管されているデータは全部壊れる。」

画面ごと撮影しようとしても普通のカメラじゃ写らないように仕掛けがしてある。これは目新しい技術だから詳細は秘密だよ」

楽しそうに話す様子は胡散臭かった。

それに、ちょっとした脅しで揺さぶってやったつもりが全く動じていない。万智は駆け引きの下手さを自覚しつつ、大きな決断を迫られて胃が軋んでいる。

視線を外してみるが映画館のロビーというのは興味を惹くものがあまり無い。映画を観る習慣など持っていないかった。それが古いものとなれば尚更だ。

そうしているうちに会話が途切れてしまつて沈黙が続く。

こうなると万智の方からは言葉が出てこない。それを相手も察してか、西野は嘲るように口元を歪める。

「このまま手をこまねいて、あの女が何の制裁も受けずにのうのと生きている……そんな現実には耐えられるかな？」

「……」

的確に、狙い澄ましたかのように告げてくる。

握った拳を膝の上に置いた万智は静かに震えた。爪が手のひらに

相変わらず注文はオムライスとオレンジジュースで、それ以外を頼むことはなかった。よほど気に入ったのだろう。

あの少女を何となく放っておけないし、昔の自分と重なるところがある。

「あーっ、今日もよく働いた！」

裏口から出て、労働を終えて今日のことを振り返る。表の小奇麗な店構えとは違つて壁は汚れた灰色で、生ゴミがはみ出したポリバケツが並ぶ。

その隙間を縫つて制服姿の切奈は開けた通りを目指す。距離にしてほんの15メートルにも満たない。

(ああいう常連さんなら大歓迎なんだけどね)

あの口下手な少女がだんだんと懐いてくれるのが最近の密かな楽しみになつていた。

他のバイト仲間は「理解できない」という顔をしていたものの、特に咎めてくることもない。

馴れ馴れしい男性客が多い中で彼女は特別な存在であり、鬱屈を隠しながら働く切奈にとってはオアシスのようなものだ。

「ん？」

そんな水と緑で満たされた地を空想していると、不意に足が止まつてしまう。

路地裏の先に見慣れない男が2人、ニヤニヤとした顔で突っ立つていた。

いかにも遊んでいますといった風体で、この手の客が店に入つてくれば頭の片隅くらいには残る。

派手さだけが売りの安っぽい服を着崩していて、見るからに田舎のヤンキーといった連中だった。

しかし記憶から引つ張る出すことができないということは店に来たことはない奴らだろう。

これまで何度か似たような光景は味わたつたことがあつた。所謂、待ちちである。

(……店の中に逃げ込むのは癪よね)

生来の気質で「逃げる」のが嫌いだった。しかし、その気質がトラブルを招くことも重々承知している。

曲げるか否か迷つた末に切奈は堂々とした足取りで進み、2人の間を通ろうとしたが片方が突き出した腕に行く手を遮られる。

不快さを隠そうともせず露骨に出し、薄目で突き放す。

「邪魔なんですけど？」

流石に初手から邪険にされると思つていなかったのか、男たちは顔を見合せて、ニヤけた面をさらに醜悪にした。

「もしかしてルックスだけじゃなくて聴力にも難があるのかしら」

強気は崩さない。切奈は派手な容姿のせいで度々、似たような目に遭つている。そのせいで意固地になつている自覚はあつたものの、乗り越えるべきだとも考えていた。

同時に、性別を武器にすることがもつとも簡単な解決方法だとい

うこともよく分かっている。

いくらビルの間に挟まれた路地とはいえ、人通りの多いアーケードに面しているのだ。

大声を出せばそれで済む。

そう思っていた矢先だった。2人組の片割れが手で自分の頭を指し示した。

それ自体には意味がない。しかし、つられてそこを凝視してしまつた隙に、もう片割れが機敏な動作で切奈の横をすり抜けて背後に回ってくる。

「えっ……？」

呆気にとられているうちに厳つい手で口を塞がれ、右の利き腕を背中へと捻り上げられた。

（こいつ、めちゃくちゃ手慣れている……！）

咄嗟に悲鳴をあげようとしたが、指を口の中に捻じ込まれていた。ならばと思いい切り噛み付いてみたが歯に当たる感触はゴムのよう。そして喉から鼻にかけて異臭が突き抜けてくる。

相手は何かを指にはめていた。それが分厚い指サックに、弛緩作用のある薬を塗つたものだとい気付けるわけもない。

声が出せず、それまでの感情から一転して頭の中が恐怖で染まっ
ていく。

暴れようとしたが内面を読まれていたのか、捻り上げられた腕に
激痛が走って力が入らなくなる。それどころか時間が経つ毎に体が

言うことを聞かなくなっていく。

八方塞がりだった。すぐ近くから人の気配がするのに助けを呼ぶ
ことができない。

この裏口は店員しか通らない場所だから、次に誰か来るとしたら
2時間後……シフト交代のときだけである。

「ふがっ……！」

情けない声しか出ない。

半ばパニックになって顎の筋肉を何度も上下させたものの、拘束
が緩むことはなかった。

「効いてきたか？」

「ああ、立っていられねえみたいだ」

ようやく腕が解放されるものの、逃げ出すことは叶わなかった。
そのまま地面へ仰向けに寝かせられるとビルとビルの隙間から青

空が覗いているのが分かる。

鼓膜からも喧騒が遠退いていく。それなのに意識だけはハッキリ
としていた。

途方も無い想像が瞬時に働き、頭の中が白紙になる。考えたくな
い全ての可能性が突き付けられて下腹部から力が抜けた。

（あっ……）

大腿が生暖かい。制服のスカートが下着に張り付く。それが何を
意味するのか理解したとき、情けなくなつて唇を噛んだ。

「おいおい、漏らしたよコイツ」

笑われた。悔しい。怖い。

こんな連中なんかに……!!

切奈は薬物で筋肉が緩んで、身動きがとれない。

一方で、くつきりとしたドス黒い感情が男たちから送られてくる
と麻痺した筈の肌はそれを感じ取って粟立つ。

1人が切奈の制服に手を伸ばし、捲り上げて胸と腹を晒した。羞
恥で体温が一気に上がり、消え入りそうな悲鳴を喉から絞り出す。

「無駄にデケェよな。何センチあるんだ？どこで売ってるんだ、こ
の派手な下着は？」

（誰か……誰か！）

心の声は——届いた。

ガサッという物音に2人の男は振り返る。切奈は視線だけで何と
かその先を確認した。

眼鏡をかけた地味な少女が、驚いた表情で立ち尽くしている。

勿論、見覚えがあった。いつもお店に来てくれる「まち」がそこ
にいた。

次の瞬間、金切り声が路地裏に響く。「まち」の甲高い悲鳴は普
段のボンボンとした喋り方からは想像ができないくらい大きい。

コンクリートの壁面を伝い、窓を振動させ、何事かと言わんばか
りにお店の裏口のドアが開いた。

「あっ……」

そこから顔を出したのは切奈の先輩にあたる店員だった。

彼女が慌てて店内に飛び込むや否や、男たちは顔を見合わせ、表
通りめがけて駆け出す。途中で「まち」を突き飛ばして逃走するま
での時間を含めても10秒足らずという、極めて早い判断である。

おそるおそる近寄ってきた「まち」は切奈の顔を覗き込んできた。
今にも泣き出しそうな表情である。

「だ、だいじょうぶですか……」

声をかけられ、切奈は安堵のあまり泣いてしまった。



あの一件からバイトに復帰するまでは3週間かかった。

普段は放任主義の母親も流石に心配して、店までクルマで送り迎
えしてくれる。周囲のバイト仲間も気を使ってくれたし、お店側も
対策として裏口に防犯カメラを取り付けた。

だからこそ、いつまでも凹んだままでいたくない。

犯人の男たちは街中を逃げる姿が目撃されていたものの、未だ捕
まってはいなかった。そのため恐怖は拭えず残ったままである。

精神面のケアで何度か医者に通い、薬を処方してもらった。
ただし、途中で飲むのが面倒になって薬袋ごと部屋に投げ投げ
してある。

自分の中で歯車が狂ったという自覚はあった。それも立て続けに、

仕事に出ても笑顔がぎこちなく、接客でもつまらないミスばかりしていた。

弱っていることは分かっているでもそれを認めたり、あるいは弱っている風に振る舞うことはしたくない。

勝ち気故のそんな性質で損をしている自覚はあった。

「はあ……」

切奈はメイド服のまま、ロッカー兼休憩スペースで机に突っ伏している。

空調の音がうるさく、そこへセミの声まで重なっている。

窓が小さくて蛍光灯なしでは暗いため、昼間から電気を付けなければならなかった。今は敢えて消してある。

今日もまた注文を取り違え、店長からは「休んでいい」と言われて奥に引っ込んだのだった。

うまくいかないことが多すぎて半ば自棄になっている。そのせいで1個、1個の事柄を取り零していく。

何とかこの悪循環を絶ちたい。

気力が湧かずにいると、顔のすぐ傍に置いたスマートフォンがメール着信を知らせて唸っていた。

送信してきたのは窮地を救ってくれた恩人・万智である。

あのと御礼をして連絡先を交換していた。

ありがたいことに、彼女は頻繁に連絡してきてくれる。ぎこちない上にちょっと年寄りくさい文面ではあるものの、切奈のことをし

きりに心配してくれた。

相手のことを考えて華美にならない程度の内容で、ただし自分の今の自撮り写真は添付して返信する。

フレームに収まった疲れた顔と乱雑な休憩室が何とも切ない感じがしてしまふ。

「ははっ、ホントだめだな今のあたし……」

屈託なく笑うことができない。

もしもあのととき、万智が居合わせなかったら今頃はもっとひどい心の傷を負っていたに違いなかった。

「どう考えてもレイプされてたわよね」

内部に留めておけなかった単語を口にする、嫌悪感と後悔がのしかかってくる。

想像するだけでも吐き気がした。あんな連中に、あんな場所で組み伏せられて、処女を失ったかもしれない。

貞操観念が特別に強いわけではないし、年相応に性的なことに興味はあった。

けれどそれは、あつてはならないことだ。

(あたしは……)

どうしてこんな目にばかり遭うのだろう。マイナス思考から抜け出そうと別のことを考えるが、その先でも暗い影がついて回った。

ふと、しばらく行っていない高校のことを思い出す。

級友に陰口を叩かれていたときのことだ。

原因は後から知ったが、その娘が片思いしている男子生徒が切奈に告白してきたことで恨みを買ってしまったのである。

切奈の派手な顔立ちとプロポーションを指して、ありもしない作り話から中傷された。

しかし、その内容の一部は後から現実化してしまい、後ろ指を指されているうちに人間関係が嫌になって登校拒否をするようになってしまう。

そしてバイトに逃避した。学校と違い、利益を出すといい共通の目的を持った仲間は気持ちのいいものであり、働くことは性に合っていた。

それにオーナーの趣味のせいか、容姿の整った女性スタッフばかりを集めているので同じような経験をした人もいて悩みを打ち明けられることもできた。

ようやく居場所ができたと思え、お金が入るといふ確約があれば頑張れる。しかし、精神的な安心感を手にしたと思っただけ先にあんなことがあった。

逃げるのは嫌い。けれど、実際は逃がれている。

その事実から目を背けるために目先の出来事には反抗的になったり、挑発的になったりしていた。

いやらしい目を向けてくる客には怯まないで仕事だと割り切り、行く手を塞ぐヤンキーの間は堂々とすり抜ける。

(分かってはいる……悪いのは、トラブルを避けようとしないうたし

自身だ……)

弱い。なんて、弱いんだ。

しまいには悲しくなってくる。

心の問題は時間が解決してくれるとは、医者の方だった。

本当にそうなってほしいものだ。他人事のように願うしかない。

「ん？」

落ち込んで肩を落としていると、先程の自撮り写真付きのメールへ返信があった。

時間があるときに、家へ遊びに来ないかという内容である。

あの内気な少女なりに精一杯、誘ってくれているのだろう。

そう思うとなんだか嬉しくなってくる。

ちやうど気分転換したいと思っていたし、新しい交友を広げるのも悪くない。切奈は即OKを出しておく、すぐに返事があって日にも決まった。

(そろそろお母さんが迎えに来るところかな……)

メールのやり取りで少したけ元気が出て、部屋の電気を点けて帰る準備を始めた。



表通りに路上駐車した営業バンの運転席で足を投げ出し、西野は

スマートフォンを操作していた。

わざわざそれっぽいスーツに着替えており、傍目にはサボっている冴えない営業マンにしか見えないだろう。

眺めている先の端末には、メイド服の少女が無理な笑顔で自撮りした写真が画面を占拠している。

「若い女の子とのメールって難しいなあ」

スマートフォンは万智の名義で購入したものだ。このやり取りが終わった後には洗浄し、西野の指紋を全部消してから彼女へ返す。

つまり、切奈を呼び出したのは通信履歴からも端末の痕跡からも万智ということになる。

女性とコミュニケーションをとるのが苦手な分野と自覚しつつも、獲物をおびき出す役割をあの短気な万智に任せるわけにはいかなかった。

あれは手負いの獣みたいな性質の持ち主であって、狡猾な狩りができるタイプではない。

激情で相手に牙を突き立てる危険な手合いだ。

だから狭い檻の中へ、餌と一緒に放り込んでやるのが一番面白いのだ。そのための準備は整っている。

視線を外に向ければ軽自動車が1台、西野のバンの前に停まっていた。中から出てきた中年の女性は周囲を警戒するようにして路地に入って行き、しばらくすると制服姿の少女と一緒に戻ってくる。

どちらも年相応に美人で人目を引く。

その少女は西野の持つスマートフォンの画面にも写っていた。

2人が同じクルマに乗って去っていったのを確認すると、今度は別のスマートフォンを取り出して万智に渡してあるタブレットPCへ連絡を入れる。

相手は同じ若い女の子に違いは無かったものの、気を利かせた文章を考える必要はない。

ただ完結に「予定通り」とだけ送った。

飲みかけの缶コーヒーに口をつけて返信を待ったが特に何も無かったので、西野は苦笑しながらエンジンキーを燃る。

先程のクルマを追うわけではない。郊外の倉庫に移動するのだ。ダミー会社を使って短期間だけ借り上げているその場所は、この街における西野のアジトになっている。警察のチェックが甘い物件を狙ったので今のところ、問題らしい問題は起こっていない。

全ては順調である。

狙ったとおりに事が運ぶのは何度味わっても気持ちのいいものだった。

「ゲームの決行日も決まったし、1人焼肉でもするか？」

少し浮かれて独り言にしてはみたものの、準備も片付けも面倒臭そうだ。

結局、西野はコンビニで弁当の他に普段だったら口にしないようなスイーツを買ってささやかな祝杯を上げたのだった。